

2014年度全学共通カリキュラム 「現代社会とジェンダー」の授業から

「現代社会とジェンダー」は立教大学全学共通カリキュラム(通称:全カリ)の主題別Bという科目群の1つである。ジェンダーフォーラムが提供する科目であり、今年は私がコーディネーターを務めた。この科目群には毎回の授業に原則として複数の教員が参加し、その教員同士の議論を学生に見てもらい、それによって問題への関心を深めてもらうという趣旨がある。

ジェンダーに関する科目は立教大学でもいくつかあるのだが、この「現代社会とジェンダー」の授業では、普段あまりジェンダーという概念を意識したことのない人にもジェンダーという概念を知ってほしいということを目的の一つにした。そのため身近な現象がジェンダーの問題に関連するのだということを知ってもらうように、幅広いテーマを扱っている。具体的には、性別役割意識の国際比較、労働とジェンダー、シングルマザーやデートDVの問題、現代の若者の男性性、女性のライフコースなどである。

実は前年度もほぼ同じテーマで授業を行ったのだが、その際、受講生に女性の労働やライフコースに関する知識が少ないことに気づいた。女子の履修生が多いのだが、漠然と「就職が難しければ専業主婦でもよい」という学生がいたことが気になり、全国的にも専業主婦願望が増加していると言われていることもあったので、今年は多少この問題に重点を置くことにした。もちろん選択肢として専業主婦という生き方があるのは否定できないし、もし女子学生が就活に疲れ、また男性並みに働くことに嫌気がさしてこのような志向を持つのであれば、それはそれで同情せざるを得ないのだが、専業主婦になるということが実際には難しいこと、そしてそれがかなりのリスクを伴うことについてはあまり知識がないのである。

この問題を意識してもらうために、ライフコースの話題の回では専業主婦をめぐる状況を説明し、グループディスカッションを取り入れた。異なるライフコースを望む人がいることを身近に感じさせることができるだろうという考えからである。講師の話を短くし、議論のポイントを示してそれについてグループでディスカッションをしてもらった。さらにその議論の内容をいくつかのグループに発表してもらい、それにまたコメントをして、問題を考えてもらうようにした。

授業全体に対する受講生の反応は、感想を読む限りは(教員に対するお世辞があるということ差し引いても)概ね好評であり、特に女子学生には、自分の将来についてもう一度考えるようになったという意見が多かった。男子学生からは「世帯の経済的なリスクを回避するために、パートナーにも働いてもらいたい」という意見も出て、女子学生には新鮮に感じた人もいたようである。

次年度は女性の労働やライフコースの問題を中心に扱い、「『婚活』現象を考える」というタイトルの授業を行う予定である。乞うご期待。
豊田 由貴夫(ジェンダーフォーラム所長/本学観光学部教授)

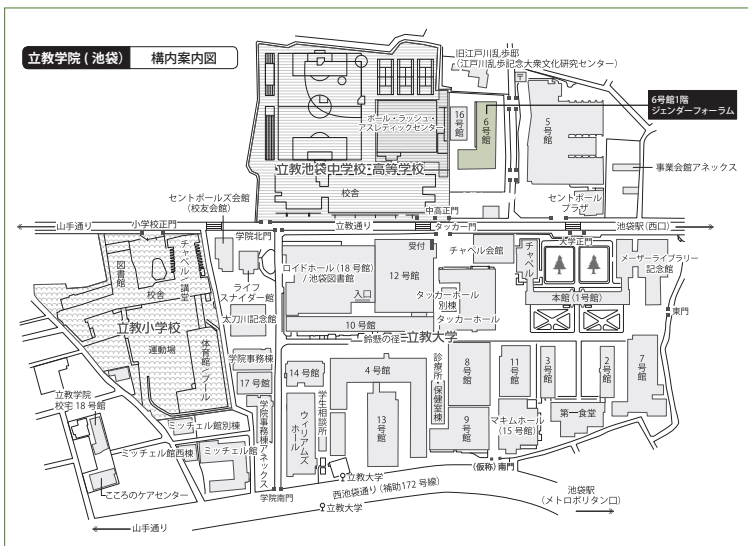


ジェンダーフォーラムは2013年3月に、ミッチェル館から6号館へ事務室を移転しました。

立教大学ジェンダーフォーラム

開室日: 毎週月曜日～金曜日
開室時間: 10:00～16:00
場所: 立教大学池袋キャンパス6号館1階
TEL&FAX: 03-3985-2307
E-mail: gender@rikkyo.ac.jp
URL: http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/

詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPをご覧ください。



Gem

Rikkyo Gender Forum
News Letter

Vol.32
2015.3.31

立教大学ジェンダーフォーラム

Gemとは…光輝く宝石。ジェンダーフォーラムの前身である女子学生寮「ミッチェル館」にちなみ、Gender Encountering at Mitchell (ミッチェル館でのジェンダーの出会い)を意味します。

第63回ジェンダーセッション(2014年10月29日(水))

インドネシアから湾岸へ ——家事労働者として働きに出ること

登壇者: 平野 恵子 氏(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター講師・研究機関研究員)

お茶の水女子大学ジェンダー研究センターの平野恵子さん講談の、第63回ジェンダーセッション「インドネシアから湾岸へ家事労働者として働きに出ること」。ジェンダーと移住労働という、現代国際社会の直面する二つの議題が同時に論じられ、現地調査から多数の写真・映像も交えられた、濃密な内容となっていた。

インドネシアはイスラム国家ではないものの、人口の9割弱がムスリムで、一国におけるその数は世界最多である。男性は働き女性は家を守るという性別役割分業がはっきりとした社会であり、インドネシア共和国1974年婚姻法にも「夫は家族の扶養者であり、妻は家庭の主婦である」(第31条)などの記述が見られる。

しかしながら、インドネシア人移住労働者は現在8割が女性(多くが農村部出身)だ。主要な移住先はサウジアラビアとマレーシアで、住み込みで料理・育児・高齢者介護・清掃などに従事し、契約上は週休一日でも実質的には休日なし。パスポートは雇用主が管理し、行動が制限される。加えて、雇用主による性的虐待が大きな問題となっている。私的領域ということで現地領事館による保護も難しく、2011年にはサウジアラビアで女性雇用主殺害の罪に問われたインドネシア人家事労働者が通告なしの斬首刑に処され、インドネシア国内でも盛んに報道され議論を呼んだ。

移住労働者からの送金額はインドネシアGDPの2%を占め、インドネシアの経済の一端を担う存在でありながら、女性移住労働者たちは宗教的観念から批判にさらされる。女性の単身移動は「ドサ(罪)」そして「ハラム(イスラム上の禁忌)」であり、平野さんのインタビューされた女性移住労働者達も、自身をそう表現していたようだ。更に、雇用主の性的虐待報道は「インドネシア女性の評判を落とす」という世論に繋がった。

女性移住労働者たちは国内外で肩身の狭い思いをしているようで、近年のインドネシアでは注目すべき動きが見られる。一つには元移住労働者の取り組みで、農村部で女性達自身が露店で売る食品加工などの小規模ビジネスを立ち上げているというもの。平野さんの見せてくださった映像では、数名の女性達が会話に花を咲かせながら楽しげに作業をしているのが印象的だった。彼女たちは更に、貧困者世帯の医療費補助を行ったり村役場に行政システムの改善を要求したりと、積極的に外部へも働きかけているという。もう一つは「新しい男性の連帯」運動で、これは都市部の男性を中心に起こっているもの。経済的に男性が主導することや強い男性性の誇示といった伝統的な男性像が拒絶され、子育てをする男性・家事をする男性・暴力をふるわない男性・異性愛主義を問いたずら男性といった新たな男性像が提案される。

インドネシアの今後だけでなく、ジェンダー、移動、そして宗教と、それぞれの関わりを改めて考えさせられる講演でした。平野さん、誘ってくださった立教大学の豊田三佳先生、どうもありがとうございました。

大坪 水木(上智大学法学部法律学科)

第64回ジェンダーセッション(2014年12月10日(木))

**「戦争と男のヒステリー
—アジア・太平洋戦争と日本軍兵士の男らしさ」**

登壇者：中村 江里(立教大学ジェンダーフォーラム事務局)

国家が市民をほしいままに徴用し、他国と全面戦争する機能を帯びようになって以来、戦闘への参加経験が個人にもたらす心的・身体的傷痕は、おおよそあらゆる国の政治的・社会的・文化的な問題となりました。

たとえば、1920～40年代のイギリス小説は、第一次大戦下のシェルショックや身体障害というモチーフなしではほとんど語り得ませんし、1980年代、ハリウッドで隆盛を極めたアメリカのアクション映画や戦争映画の多くは、ベトナム戦争のもたらした傷への省察が多様なテーマに結実することで、成立していました。戦場に組み込まれた個人が負う傷とは、つまり、すでに1世紀にわたって切実に捉えられ、身近に再提起されてきた問題なのです。

またこれは、軍隊が一国の最大の公務員組織となり、常に志願者を募集するような体制に変わった今日でも変わりありません。戦争が兵士に与える障害は、アメリカでは国家賠償の側面から論争に付されたまま、解決をみていません。これは、この国が他国や他地域へ与えた軍事的被害の深刻な裏面として、戦争が惹き起こす暴虐な結果の多方向性を知らしめる出来事にほかなりません。

中村江里さんがお話しくださったのは、そうしたいわば近代世界的な出来事の、日本における一つの事例であったのではないかと思います。1880年代から敗戦時までの長いスパンから興味深い史料を示しつつ、中村さんは、兵士や軍人の正統性が「男らしさ」のコードから言説化された諸局面と、その意味を紐解かれました。そのうえで「長期的で苛烈な戦闘を特徴とする総力戦に動員された兵士たちの間で、多くの『男のヒステリー』が見られた」という、一見驚くべき現象が紹介されました。確かに非常に面白い現象です。

兵士という役割に「男らしさ」を本質化しつつ、他方で、極限状態では「男」にも「ヒステリー」というほんらい女性化された病理が現れうると診断するのですから、これが本当だとすると、この言説生産のフィールドでは、「男らしさ」など状況次第で危うくなる擬制なのだという理が認められていることとなります。「ヒステリー」という言葉が日本の文脈で得た特殊な意味や用法があるのではないかと。軍国日本の医学界は、なぜことさらに、ヒステリーというコンセプトから戦争神経症を理解したのが——「男のヒステリー」という観念の構造は、この点からも解明されるべき問題なのだろうと感じました。

新田 啓子(ジェンダーフォーラム所員/本学文学部教授)



講演会

「大学の中のトランスジェンダー」

日時：2014年12月12日(金)

講師：虎井 まさ衛 氏(立教大学兼任講師)

主催：立教大学学生相談所

共催：人権・ハラスメント対策センター、ジェンダーフォーラム



講師の虎井まさ衛先生は、本学の兼任講師をされていますが、講義に出席する200～300名の学生の中に、毎年必ず50名程のセクシュアル・マイノリティ当事者やその家族、友人がいるとのこと。コメントペーパーに書かれていたり、授業の終わった時などに直接話しをしてるので分りますが、普段の様子では、その本人がLGBTといったセクシュアル・マイノリティであるかどうかは分からない場合も多いと思われます。虎井先生ご自身は、学生時代はまだ女性の身体の状態で、その身体を受け入れることはできず、極力ご自分の身体にふれることを避ける生活をされていました。夏でも胸に晒しを巻き、お風呂に入る回数を極力減らし、女性の声を出すことを避けるために極力話さないようにし、と、まさに性=生であり、性を受け入れられない状況では生を続けることが困難であったことをお話し頂きました。先生は卒業後渡米し、性別適合手術を受けられましたが、ミニコミ誌『FTM 日本』を創刊され、様々な場面でご自身の体験を基に活動され、2001年のTVドラマ『3年B組金八先生』第6シリーズで主要テーマとして取り上げられました。

講演の中で、昨年度文部科学省が全国の小中高校に性同一性障害(*)であることを悩んでいる児童生徒についてのアンケートを取り、その中で特別な配慮をしている事例は6割にとどまっていることが紹介されました。参加者の中からも、例えば体育の際の着替えについての配慮や、大学の窓口でどのような対応をしたらよいかとの質問もありましたが、何より対応する大学関係者が、各々の当事者である学生が性=生で困難な状況であることを受け止め、出来る限りの対応を心がけることに尽きると思います。

*当日の資料でも紹介されましたが、日本精神神経学会が、5月に米国精神医学会の診断手引き「DSM-5」の改定に伴い、新しい訳語の指針の中で「性同一性障害(Gender Identity Disorder=G.I.D)」を「性別違和(Gender Dysphoria)」と変更することを発表しました。子どもの時期に多い症例を中心に、「障害」という言葉を減らしたものです。

鈴木 克仁(ジェンダーフォーラム運営委員/新座学生相談所)

文献紹介

『何を怖れる—フェミニズムを生きる女たち』／松井 久子[編]

(岩波書店、2014年)

本書は、同名のドキュメンタリー映画に登場する15人のフェミニストのインタビューから、12人の証言をおさめた記録です。まずこのタイトルに魅かれる方も多いのではないのでしょうか。

松井監督は、かつて「フェミニスト」と名指されることを怖れていた「ごくふつうの」女性だったそうです。しかし、1970年代のウーマン・リブの時代から現在までの日本のフェミニスト達の軌跡を追い、様々な「女という経験」に耳を傾ける中で、まさにその「怖れ」こそが女たちの間に様々な分断を

生みだしていることに気づいたと言います。このような映画制作過程での監督ご自身の変化から、この映画に登場するフェミニスト達の主張と、日々「ふつうの」女性たちが感じている痛みや違和感が、実は深いところにつながっているのではないかと気づかれます。

本書には、時間の関係で映画ではカットされた言葉も収録されているそうです。それぞれの肉声や表情の変化をとらえた映像とあわせて読めば、また新たな発見があるかもしれません。一粒で二度美味しいこの作品、ぜひご覧になってみて下さい。

(ジェンダーフォーラム事務局・中村 江里)